

2025.12.14.

「受胎告知」

旧約 創世記 18章9節～15節

新約 ルカによる福音書 1章26～38節

1. はじめに

アドベント第三の主の日を迎えていました。来週はクリスマス礼拝となります。今朝与えられている御言葉は、天使ガブリエルがイエス様の母となるマリアにイエス様を身ごもることを告げた場面です。いわゆる「受胎告知」と言われる、アドベントの時期に必ず読まれる大変有名な場面です。たくさんの絵も描かれています。私共はローマ・カトリック教会のようにイエス様の母マリアをマリア様とは呼びませんし、マリアには原罪がないと信じたり、マリアに祈りを捧げるということもいたしません。しかし、マリアがイエス様を産むという、神様の救いの御業に特別な方で用いられたということは確かなことです。そして、このマリアの姿に、信仰者としての私共のあり方が明示されているということも確かなことです。共に御言葉を受けて、クリスマスに向けて信仰を整えてまいりたいと思います。

2. マリアとヨセフ

さて、天使ガブリエルから「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げられた時、マリアの年齢は10代半ば～10代前半ではなかったかと考えられています。当時、女性は15才、16才で結婚するのが普通でしたから、ヨセフのいいなずけであったマリアはそれより少し若い、現代で言えば中学生くらいだったでしょう。若いというよりも、幼いと言って良い年齢でした。一方、マリアのいいなずけであったヨセフは、そんなに若くはなかったと考えられます。何故なら、結婚する男性は生活力があり、結婚しても家族を養える人でなければならなかったからです。彼は大工でした（マタイ13：55）。彼の父も大工だったでしょう。若くして見習いとして働き始めたとしても、一人前の大工として生活できる位になるには20才後半から30才くらいにはなっていたと考えられています。10才かそれ以上の年の差があったでしょう。

では、どうしてヨセフとマリアがイエス様の両親として神様によって選ばれたのでしょうか。本当の理由は神様しか知らないことですけれど、考えられる理由は二つあります。一つはヨセフがダビデの家系であったということです。何故なら、旧約において救い主メシア、キリストはダビデの子孫として生まれると預言されていたからです。代表的な箇所を1箇所上げましょう。ここもクリスマスの時期によく読まれる箇所の一つで、代表的なキリスト預言の箇所です。イザヤ書11章1～5節「11:1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち／ 11:2 その上に主の靈がとどまる。知恵と識別の靈／思慮と勇気の靈／主を知り、畏れ敬う靈。 11:3 彼は主を畏れ敬う靈に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にすることによって

弁護することはない。 11:4 弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち／唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。 11:5 正義をその腰の帶とし／真実をその身に帯びる。」エッサイというのは、植物の名前ではありません。ダビデのお父さんの名前です。ですから、「エッサイの株から」というのは「エッサイの子孫から」ということであり、つまりダビデの家系からということになります。贊美歌 21-248 「エッサイの根より 生いいでたる、預言によりて 伝えられし バラは咲きぬ。」と歌われているのはこの預言のこと、「ばら」とはイエス様のことです。ですから、教会の玄関に飾られているクリスマスリースの花は、バラなのですね。また、マタイによる福音書がイエス様の系図を記すことから始めているのも、イエス様がダビデの家系であるヨセフの子であることを示すためでした。

もう一つの理由は、マリアとヨセフがまだ結婚していなかったけれど、「いいなずけ」、婚約中という状態であったということです。当時は、婚前交渉というようなことはあり得ません。結婚していないということは、性的関係は無かったということです。救い主であるイエス様は、男性によってではなく、神様によって身ごもられ、神の子として誕生しなければならなかつたからです。ただのヨセフとマリアの子ということであれば、それは普通の人間の子です。マリアから生まれたのですから、確かに人間の子です。しかし、ヨセフとの間に生まれた子ではない。聖霊によって身ごもつた子である。ここに、眞の人にして、眞の神である「神の御子」イエス様が誕生しました。そのようなあり方で誕生しなければならなかつたイエス様は、どうしてもまだ結婚していない女性を母としなければならなかつたということです。それ以上の理由については、私共の知り得る範囲を超えていきます。

3. 6ヶ月目に

さて、受胎告知の出来事は、「6ヶ月目に」起きたと聖書は告げます。何から6ヶ月目かと申しますと、洗礼者ヨハネを高齢になったエリザベトが身ごもつてから6ヶ月目ということです。高齢になっていたエリザベトが身ごもつたという出来事に続いて、この受胎告知の場面は記されています。どちらの場面でも、神様の御心を告げる天使はガブリエルです。つまり、洗礼者ヨハネの誕生とイエス様の誕生はどちらも不思議な神様の御業であると聖書は告げています。一方は高齢の女性から生まれ、もう一方は聖霊なる神様によって身ごもり誕生します。聖書は、洗礼者ヨハネとイエス様の不思議な誕生のあり方を描くことによって、神様が直接この世界に介入され、遂に神様の救いの御業、長い間神の民が待ち望んでいた神様の救いの御業が始まった、そのように告げているわけです。

受胎告知の出来事について、順に見てまいりましょう。

4. ガブリエルの言葉① おめでとう、恵まれた方。

まず、天使ガブリエルがおとめマリアのもとに現れます。マリアは驚いたことでしょう。天使に

出会って驚き、畏れない人はいません。そのマリアに天使ガブリエルはこう告げました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」(1:28) マリアは畏れ、驚き、戸惑いました。いったい何がめでたいのか？主が共におられるとはどういうことなのか？天使は私に何を告げたいのか？何がこれから起きるのか？聖書は「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」(1:29) と告げております。私共はこの受胎告知の場面を、あつという間の出来事であったかのように思っているところがあります。確かにこの場面をさっと読むのに1分とかかりません。しかし、この出来事は、マリアが「考え込む」だけの時間を要した。それなりの時間の流れの中での出来事であったということを示しています。神様の言葉というものは、告げられる那一瞬のうちにこういうことなのかと受け止めることができる、理解できる、腑に落ちる、そういうものではなくて、しばらくの時間が必要なものです。マリアは恐れ、戸惑いつつも、頭はフル回転したことでしょう。

5. ガブリエルの言葉② あなたは男の子を産む

マリアが戸惑い、何のことかと考えんでいる中で、天使は言葉を繋いでいきます。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。 1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」(1:30.31) そう天使は告げました。天使が告げたことは、マリアが今まで考えたこともない、まったく想像を超えた驚くべきことでした。マリアは聖なる天使を前に畏っていましたが、そのマリアに天使は「恐れるな」と告げ、「神様から恵みをいただいた」と告げます。その恵みとはマリアが「身ごもって男の子を産む」ということでした。そして、「その名をイエスと名付けなさい」というのです。マリアはまだ結婚していません。その私が子を産む、どうしてそれが「神様の恵み」なのか、マリアには全く意味が分かりませんでした。マリアはヨセフといういいなずけがいます。自分がヨセフと結婚して、そのヨセフとの間に男の子が与えられるというのでしたら、それは確かに喜ばしいことです。神様の恵みであるに違いありません。しかし、マリアはまだ結婚していません。天使が告げていることは、ヨセフと結婚してからのことなのか？でも、そんなことをわざわざ天使が告げに来るだろうか？

更に天使は言葉を繋ぎます。「1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。 1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」今、この天使の言葉を丁寧に見ていくとまはりませんけれど、ここで天使が告げた言葉は、全て旧約においてメシア・キリストの到来の預言において告げられてきた言葉です。天使は、与えられる男の子が「偉大な人」になり、「いと高き方の子」つまり「神の御子」と呼ばれる者となる。その子はやがて「ダビデの王座」に就き、神の民イスラエルの「永遠の王」となる。まだ幼いと言ってもよいくらいのマリアには、この天使の言葉が、旧約において預言されていた言葉であるということまでは、良く分からなかつたでしょう。しかし、それでも、自分が産む男の子が救い主・メシア・キリストとなるということだけは分かつたのではないでしようか。

6. マリアの言葉① どうしてあり得ましょう

そしてマリアは、天使が告げたことが「とてもとても、自分のような者が受け入れることなど出来るはずもないこと」「とんでもないこと」であると悟ったのでしょう。そしてマリアは思わず天使にこう告げました。「**どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。**」(1:34) この言葉は、結婚していない自分にどうして子を生めましょう、そんなことはあり得ません。マリアはここで、そのように生物学的にあり得ないことだと否定しているように見えます。確かに、そのように読むことも出来ます。しかし、ここでマリアが告げたことは、本当にただそれだけだったのでしょうか。ここまで、天使は「あなたは聖霊によって身ごもる」とは、一言も言っていません。ですから、ここでのマリアの言葉は、結婚していないのだからあり得ないというような装いをしながら、つまりそのような言い訳をしながら、マリアは「神の御子を生むなんて大それたことは嫌だ」「私には出来ません」「とんでもないことです。あり得ません。」というような、神様の御業に用いられることに対しての拒否だったのではないかでしょうか。ちょうど、モーセがイスラエルをエジプトから脱出させるためにリーダーとして選ばれたときに、色々な理由を付けては「そんなことは嫌だ、出来ない」と何度も言い続けた時(出エジプト記3章・4章)と同じです。勿論、神様はそのようなマリアの思いを「それは仕方のないことだね」と言って、ご自分のご計画をひるがえすことはありませんでした。ちょうどモーセの何度も繰り返す拒否に対しても、その理由を一つ一つ摘み取りながら結局モーセはイスラエルをエジプトから導き出す者として立てられていったのと同じです。

マリア様と言ってマリアを特別に聖なる者としてあがめる人は、このような理解はしないかもしれません。しかし、マリアは神様の御業に特別に用いられる者として立てられようとしたこの時、それをすぐに受け入れることは出来なかった。そして拒否した。これは私共には良く分ります。この時のマリアの戸惑い、そして神様の召し出しに対しての拒否。これは私共の多くが知っている、身に覚えがある出来事なのではないでしょうか。例えば、長老に最初に選ばれたとき「どうしよう」と思わなかつた人はいないでしょう。そして「私に出来るだろうか。そんな責任を負うのは嫌だ。困った。」皆、そのような思いを抱いたでしょう。しかし、神様はその思いをもご存じで私共を選び、召し出し、立てられます。私が伝道者として召されたときもそうでした。マリアも同じでした。ですから、神様の召しを受けて、「私には出来ない。もう、無理。」と思ったなら、この時のマリアを思い出しましょう。勿論、私共の召し出しとマリアを神様が召し出した事柄は同じではありません。マリアは神様の御子をお腹に宿したのですから、このような特別な御業に用いられた人は他にはいません。でも、神様の御業に用いられて立てられようとして召し出されたときに、「嫌だ。出来ない。もう、無理。」と思うのは誰もが同じです。神様の御業に仕えるのに「自分は出来る」と思える人などいません。神様の御業は、私共の能力を遙かに超えたところで為されていくものだからです。でも、大丈夫です。神様はその全能の御力をもって、ご自分が召し出した者を護り、支え、

導いてくださり、必ず御業を成就されるお方です。そのことを次の天使の言葉がはっきり告げています。

7. ガブリエルの言葉③ 神の出来ないことは何一つない

天使は告げます。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」遂に、天使は「聖霊が降って、神様の力によって男の子が生まれ」る告げます。そして、その子が「聖なる者、神の子」と呼ばれると言うのです。聖書において「聖なる者」と言えば、神様しかおりません。つまり、聖霊なる神様によって身ごもり、神の御子である神様を生むことになると告げたわけです。遂に、とんでもないことが告げられました。聖霊なる神様によって、神様である神の御子を身ごもる。何ということ。あり得ない。いよいよ、マリアは途方に暮れたことでしょう。その心を見透かしたかのように、天使は更に告げます。「1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。」高齢になっていたエリザベト、多分60歳代にはなっていたのではないかと私は考えていますけれど、彼女が身ごもったという話は、親類達の間で話題にもなりマリアはも知っていたでしょう。「こんなことってあるんだね。」と皆で話していた。あのあり得ないようなことも、神様の御業だったのかとマリアは知らされます。

そして、決定的な言葉「1:37 神にできないことは何一つない。」とマリアは告げられました。この言葉は、先ほどお読みしました創世記18章において、99才のアブラハムと89才のサラに「来年男の子が与えられる」と御使いに告げられた時、アブラハムもサラもそれを受け入れ信じることが出来ませんでした。「そんな馬鹿なことがあるわけがない」と思いました。その二人に御使いが告げられた言葉が「主に不可能なことがあろうか。」(創世記 18:14)でした。この時マリアに告げられた言葉と同じです。ちなみに、アブラハムもサラもこの御使いの言葉を信じられずに笑ってしまいました。そして生まれたのが「イサク」(彼は笑う)でした。神様を信じられずに、神様を馬鹿にした二人の笑いを、神様は喜びの笑い、神様を誉め讃える笑いに変えてくださいました。神様に出来ないことは何一つありません。私共はクリスマスを迎える度に、このことを新しく心に刻みます。神様に出来ないことは何一つありません。

8. マリアの言葉② わたしは主の婢です。お言葉通りこの身になりますように

そして、この御使いの言葉に応えるようにマリアの口から出た言葉を、私の言葉として、今朝、新しく神様に申し上げたいと思うのです。38 節「わたしは主のはしためです。」マリアは御使いの言葉に打たれて、自分が何者であるかを知らされました。そして、「わたしは主のはしためです。」と告げます。「はしため」とは「奴隸の女」という意味です。マリアはそれほどまでに自分を卑しく、つまらない者と思ったのでしょうか。このマリアの言葉の力点、強調点はそこにあるのではありません。大切なのは「主のはしため」の「主の」です。マリアは、改めて「聖なる主」「全能の

主」「栄光の主」の御前に自分がいることを知らされたのです。そして、そのお方が永遠の救いのご計画の中で、今、救い主を与え、救いの御業を為そうとしている。その御心にマリアは触れたのです。神様の栄光の光に照らし出されて、本当の自分の姿を知らされました。そして、自分はなんと小さな、何と身勝手な、何と愚かな者であったかを知りました。そこで出た言葉が「わたしは主のはしためです」という言葉でした。こう言っても良いでしょう。愛する独り子を与えてまでも、私共罪人を救おうとされる神様の御心に触れて悔い改めた最初の人。それがマリアでした。

そして、マリアは続けます。「**お言葉どおり、この身に成りますように。**」マリアは、神様の御業のために自分自身が用いられることを受け入れました。ただの人間が、神の御子の母となる。どうしてそんな大それたことを受け入れることが出来ましょう。とっとと逃げ出したい。マリアもそう思いました。しかし、出来ませんでした。聖なる神様の御心、何としても罪人を救おうとする神様のご決意、どんなものによっても決して動かされることのない神様の救いのご意思、天も地も入れることが出来ない大いなるお方の計画、それに触れてしまった。わたしがこの命を与えられたのも、ヨセフと出会ったのも、みんなこの方の御心の中のこと。そのお方が「マリア」とわたしの名を呼び、永遠の救いの御業にわたしを用いると言われる。「分かりました。降参します。あなた様はわたしの主。ただ独りの王です。どうぞ、ご用のためにわたしをお用いください。わたしは何も出来ませんけれど、あなた様が全能の御力をもってことを起こされるのならば、全てを為し遂げられるでしょう。御心のままに、存分に用いてください。」そうマリアは告げるしかありませんでした。

しかし、誤解ではありません。マリアは厭々、仕方なくこう告げたのではありません。この言葉を告げたとき、マリアには恐れも不安も嘆きもありませんでした。そこにはただ静かな平安と大いなる喜びだけがありました。マリアは変えられました。この変化こそが、マリアが「神様から恵みをいただいた」しるしでした。私共もこの平安と喜びへと招かれています。クリスマスを迎えるとするこの時、私共もまた神様の御業に用いられることを喜び、誇りとする者として、マリアと共に「わたしは主の僕です。御心のままに私を用いてください。」と神様に、心を一つにして祈りを合わせたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、受胎告知の場面の御言葉から、私共一人一人に語りかけてくださいました。ありがとうございます。大いなるあなた様は、私共の頭の中などに入りきるはずがありません。それなのに、私共は自分の小さな秤で、あなた様の言葉と業とを判断しようとします。まことに愚かな者です。お赦しください。どうか、まことに小さな者ですけれど、私共を御心のままに、存分にお用いください。私共自身を、あなた様の御業の舞台としてください。ただ、あなた様の御名だけが讃め讃められますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン